

隠岐の昆虫，アオハナムグリ

島根大学生物資源科学部

箭内 緑・星川 和夫

日本海に浮かぶ隠岐島は、島根県本土から約70kmの距離にある群島です。美しい景観に恵まれたこの島々は大山隠岐国立公園にも指定されており、毎年多くの観光客や釣り人が訪れます。

隠岐諸島は大きく4つの島から成り立ち、東の一番大きな島を島後、西に3つ固まっている島をまとめて島前と呼んでいます。島前はさらに西ノ島、中ノ島、知夫里島の3島から成っています。こうした島では、そこに住む生物も本土とは少し違う様相を見せてくれます。本土ではごく普通に見られる生物が見られなかったり、逆に島でしか出会えない生物もいます。今回の話の主役である、アオハナムグリもその代表的な例です。アオハナムグリは日本全国どこでも見られる昆虫です。背中が緑色、腹は赤がね色をしていて、暖かい季節になると花粉を食べるために花から花へ飛びまわります。

さて、このアオハナムグリですが、本土で見られる個体は一様に緑色であるのに対し、島前では濃い紫色の個体が見つっています。不思議な事に、紫色の個体はこれまで島前でしか見つかっていません。島前（西ノ島）から20kmも離れていない島後のアオハナムグリは本土と同じ、緑色をしているのです。

しかし、距離を考えてみると島前よりも島後の方が明らかに本土から離れています。はたして、島前のアオハナムグリだけが特別なのでしょうか？また、島前と本土、そして本土との間で体の色以外にも何か違いはないのでしょうか？このことを調べるために、島後・島前（西ノ島）・本土（島根半島）にてアオハナムグリを採集し、色彩以外の形質である体サイズや脚の長さ、翅の長さなどを測定しました。その結果、島根半島と隠岐諸島の結果を比べた場合、島に特有の変化が見られる事がわかりました。また、島前個体群では島特有の変化に加えて島前でしか見られない変化も認められました。

こうした変化は遺伝的な要因も大きいのですが、生息地が分断された事に端を発している事が多いのです。隠岐諸島は数万年前まで本土と陸続きでした。その頃は現在隠岐諸島になっている所に住んでいるアオハナムグリは緑色をしていたでしょう。しかし、氷河期が終わると海水面が上昇し、隠岐と本土との生物の交流が絶たれてしまいました。こうして島という環境に隔離されてしまったアオハナムグリは、島前・島後で独自に変化していったと考えられます。

こうした観点から、今回の発表では隠岐のアオハナムグリがいかに形成されていったのかをみなさんと一緒に追いかけてみたいと思います。